
アルデンテ

haregbee

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルデンテ

【Nコード】

N8952X

【作者名】

haregbee

【あらすじ】

素直な女の子とひねくれた男の子は、兄妹になって、恋をする。

一分目（前書き）

R15的な展開は極力抑えたいです。

一分目

自分の泣き声がこんなに惨めな響きを持っているなんて、知らなかった。

ほんの30分前まで、大のお気に入りだったソファアーの上が今では恐ろしい場所に変貌していた。

「お願いだから、やめて」

泣いて頼んでも、背後から伸びる力強い腕が私を離すことはない。

「ちひろがいけないんだよ」

耳元で囁かれると、背筋がぞくりと震えた。

Tシャツの裾からすべりこんだ大きな手は、胸元の膨らみを包みゆつくりと揉みほぐしている。

硬い胸に寄りかかるようにして膝に乗せられているから、表情を見ることができないけれど、軽蔑するように冷ややかな視線は注がれているのだろう。

「私が悪かったの。謝るから、もうやめて。お母さんが帰ってき」

言い終える前に顎をつかまれて振り返るように斜め上を向かされた。

「見せてやればいい」

残酷な言葉は、激しい口付けと共に降ってきた。

無理矢理に口をこじ開けられ、舌を絡ませられていたから、しばらくは話すことはおろか、息をすることさえままならなかった。

それでも、伝えなればいけない言葉があった。

熱く執拗な唇が離れた一瞬の隙を逃さず、口を開いた。

「で、出ていくから」

冷たい怒りを含んだ瞳が揺れて、驚きが浮かんだのは、ひどく意外だった。

二分目

「佐伯は、北高か」

「はい」

笑顔で答えると、担任は満足そうに頷いた。

「北高は近いし、お前の成績なら妥当なところだろう。成績を落とさず、頑張れよ」

「ありがとうございます」

三分で面接を終えて出てくると、廊下で順番待ちしていたよっちゃんに驚かれた。

最近は、成績に見合った公立よりもがつつり大学受験指導してくれる私立を希望する子も増えているようで、先生の進路指導も大変そうだ。

将来の夢は、小学校の頃から既に決まっていたので、進路を迷うことはなかった。

母のイタリアンレストランを継ぐことが私の夢だ。

中学を卒業したら、すぐにでもイタリアへ修行に行こうと思ったけれど、高校だけは出ておけと言われたので、自転車で20分の北高を受験することにした。

調理科のある学校に進学する気はない。

母を手伝う方が、経験的にも経済的にも有利な気がしたからだ。

進路指導面談のおかげで、午前授業だったので、母親の店に寄っていくことにした。

高級住宅街の中にある隠れ家風な一軒家が母のイタリアンレストランだ。

店名は、リストランテ・ビアンコ。

イタリア語で、白いレストランという意味なんだけど、名前通りに店の壁は全て真っ白だ。

午後1時を少し過ぎたばかりだったが、店の前には行列ができていた。

裏口を開けると、厨房の中はちよつとした戦場だった。

シェフである母親は、私に目もくれずに最近入った室井君を叱り飛ばしている。

他の従業員も黙々と調理に没頭している。

昼時の忙しい時間で、私の存在に反応してくれる人なんか、ひとりしかない。

厨房窓からホールを覗いたけれど、大きな背中が見当たらないので、きよろきよろしていると、太くて毛むくじらの腕が私を背後から

ぎゅっと抱きしめた。

「チヒロ！オカエリ！」

見上げると、丸いフレームの眼鏡をかけた陽気なイタリア人がここに笑っていた。

「ただいま、ステファン」

「ガッコは、どーだったカナ」

「楽しかったよ。モルト・ベーネ」

「M o l t o b e n e ! チヒロは、ものおぼえがヨイネ」

「ありがと。また、イタリア語教えてね」

ステファンは、覚えてたの指きりげんまで約束してくれた。

カメリエーレ（給仕スタッフ）のステファノがホールに戻ると、私は厨房の隅でひたすら洗い物をした。

まだ下準備も手伝わしてもらえないけれど、厨房に入れてもらえるようになっただけ、快挙だ。

一心不乱に洗い物をしていると、母に声をかけられた。

「休憩時間よ。そろそろ家に帰って、勉強しなさい」

「お腹すいちゃった。まかない食べてから帰ってもいい？」

「いいわよ」

ホールでは、従業員達が遅めの昼食をとっていた。

皆にまじってトマトベースの海鮮パスタを食べていると、カランカランとドアが開く音がした。

「申し訳ありませんが、今は休憩時間なんです」

様子を見に行ったバイトのカオル君の声が聞こえた。

「いえ、食事ではないんです。佐伯さんはいらっしゃいますか」

「シェフのお客様ですか。大変失礼いたしました。こちらにどうぞ」

しばらくすると、知らないおじさんが入ってきて、母が慌てて立ちあがった。

「祐二さん！」

祐二さんといやはらは、真っ直ぐ母の前に来ると、いきなりひざまずいた。

「香織さん。待たせてしまって、申し訳ない。もう嫌われてしまったかもしれないけれど、これだけは言わせてください」

祐二さんは、スーツのポケットから小さな箱を取り出すと、啞然としている母の前でパカッとばかりに開いた。

小さな箱の中から、燦然と輝く巨大なダイヤモンドがついた指輪が現れると、誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

「あなたが好きです。どうか、結婚してください」

母が涙ぐみながら頷いた時、私に生まれて初めての父親ができた。

三分目

「息子の歩です」

祐二さんが連れてきた男の子を見たとき、私は腰を抜かさんばかりに驚いた。

息子さんは、全然祐二さんに似ていなかった。

「はじめまして。国本歩です」

背の高い男の子は、私と母を見ると、にっこりと笑った。

恐ろしく整った顔立ちは、笑うと崩れるどころか、ますます浮世離れした美貌になった。

「ちひろちゃんは、中学生？」

「中三です」

「受験生か。大変だね」

「歩さんは、高校生ですか」

「うん。歩って呼んでいいよ。なんなら、お兄ちゃんでも」

優しく笑いかけられて、ときどきしない方がおかしい。

色気にあてられて、危うく鼻血を出しそうになった。

「なに、ぼんやりしているの」

すっかりのぼせあがった私に一喝いれた後、母は、歩君に笑いかけた。

「うちの子まだ中学生だから、お手柔らかにね」

歩君が困ったような表情を浮かべたので、私は口を挟んだ。

「もうすぐ高校生だよ」

「ぼやぼやしていると、どうなるか分からないわよ」

「大丈夫だもん」

「あら、油断大敵よ」

「先生に聞いてみれば、」

母と言い合っていると、祐二さんがくすくす笑い出した。

視線を向けると、祐二さんは慌てて笑うのをやめて、咳払いをした。

「ごめん、つい。でも、困ったことがあれば、歩に聞くといいよ」

「そういえば、歩君は栄真高校だったわね。すごいわ」

母が挙げた高校は、私も聞いたことがあった。

国内有数の名門高校だ。

「運が良かっただけです」

歩君は、照れくさそうに答えたけれど、私は新しい兄をますます尊敬した。

背が高くて、かっこよくて、頭まで良いなんて。

母と私は、四人で会食した次の週、祐二さんの家に引っ越した。

新しい家は、母のレストランがある高級住宅街に立つ大きな家だった。

「お屋敷ってかんじだ」

あまりの大きさに口を開けて突っ立っていると、祐二さんと歩君が迎えにでてきた。

「ちひろの部屋は、俺の隣だよ」

歩君はそう言って、私の荷物を持って案内してくれた。

呼び捨てにされたのが、恥ずかしいけれど、嬉しかった。

「兄妹って、いいね」

「そうだね」

歩君は、振り向かなかったけれど、優しい声で返事を返してくれた。

カーテンからベッドカバーまで私の好きなオレンジ色にまとめられた部屋も素敵だったけれど、私が何より気に入ったのは、居間のソファだった。

母は住居に頓着しない人で、生まれてからずっと狭いアパート暮らしだったので、ソファなんて置くスペースはなかったのだ。

そもそもソファは、家族がくつろいでお喋りしたりする場所だと思う。

仕事で忙しい母と話す時間はほとんどなかったので、ソファは本当に必要なものだった。

あんまり嬉しかったので、革張りのソファの上でぴよんぴよん飛び跳ねると、歩君はぎょっとした顔をした。

「ソファー好きなの？」

「うん！ソファでテレビ見たり、たくさんお喋りしよう」

「俺と？」

「うん！歩君と祐二さんとお母さんも！だって、家族になったんだから」

ほんの一瞬だけ、歩君の表情が変わった。

でも、たった一瞬で、出会ったばかりの私には、歩君が何を考えているのか見当もつかなかった。

歩君は過去に囚われていた。

今もそうなので、とても可哀そうな人だ。

そんな人に恋をした私もまた、同情に値すると今に思う。

四分目

北高に合格した私は、晴れて女子高生になった。

ワクワクの春が過ぎた後は、ドキドキの夏が来るはずだったのに。

マツクのシェイクが美味しい季節なのに、どうも物足りない。

目の前でこれ見よがしにiphone4Sをいじっているよっちゃんを睨んでいた私は、叫んだ。

「ペルケ！」

「何それ。また、イタリア語？」

目も上げないで答えるよっちゃんは、彼氏にメールを打っているにちがいない。

「なぜだ！」

「どうしたのよ」

「なんで、彼氏ができないんだよお」

「合コンに来なかったくせに、何言ってるの」

よっちゃんに冷たく突き放されたら、悔し涙が出てきた。

「自分だけ彼氏作って目の前でラブラブメールなんて、よっちゃん

の薄情者。私だって、合コン行くつもりだったんだよ。でも、歩君が具合悪くなっちゃったんだもん。」

「でたよ、ブラコン」

「え、ブラコン？」

「とぼけなくていいよ。つまんないし」

幼稚園から腐ったご縁があるよっちゃんの言葉は、容赦ない。

「ブラコンじゃないよ」

そう言いながらも、少し焦って思い返してみた。

昨日は、お風呂から出て、一緒にゲームをした。

初めのうちはお風呂上がりの歩君にドキドキして、ゲームどころじゃなかったのに、だんだん夢中になって、朝起きたら、ベッドの上にいた。

「じゃ、シスコンか。どっちにしろ、うざいね」

「歩君は、シスコンなんかじゃありません。麗しき兄妹愛にけちつけるのはやめて」

「そっちこそ、彼氏持ちに絡むのやめてよね」

言い負かされた私は、仕方ないので、ケータイを開いた。

一緒にいるのにお互いケータイをいじっているなんて、マックでよく見かける女子高生じゃないか。

「あ、歩君からメールが来てる」

「何だって？」

「講習終わったら、迎えにきてくれるって。なになに、スーパーで買い出しだって。そだ、よっちゃん。夕飯食べに来ない？今日は、焼肉だよ」

「肉か。最近食べてないや。行こうかな」

「お父さんが松坂牛もらってきたんだって」

現金なよっちゃんは、期待に目を輝かせた。

「霜降ってる？」

「降ってるよお」

霜降り肉を想像しながら、午後の講習を受けたら、やたらとお腹が減ってしまった。

よっちゃんとは、別のクラスなので、塾の前で合流した。

「歩君、顔だけ見れば、神レベルだよね」

よっちゃんの何気ない呟きにどきっとした。

「よよよよっちゃん。歩君みたいな人がタイプなの？」

「動揺しすぎでしょ。安心しなよ。マザコンとシスコンだけはありえないから」

「だから、シスコンじゃないって」

「高校生の妹を塾まで迎えにくるなんて、立派なシスコンでしょ」

何もそんな大きな声で言わなくても。

「よっちゃん。聞こえてるよ」

気がつくど、歩君が後ろに立っていた。

「そいつはどうもすみませんね。根が正直なもので」

よっちゃんは悪びれもなく言うど、歩君は苦笑いした。

お母さんもだけど、よっちゃんも会うたびになぜか歩君に絡む。

もしかして、意地悪は好きの裏返しってパターンだろうか。

私は、慌てて助け舟を出した。

というか、よっちゃんと歩君が並んで歩きだしてしまったので、仲間に入りたかった。

「その言い方、おじさんみたいだよ。よっちゃんの彼氏って、もしかしておばさんみたいなの？」

「うるさい。あんたが口を挟むと、ややこしくなる」

長身のふたりの間に押し入ろうとしたけれど、よっちゃんに締め出されてしまった。

「ちひろが前にハマってたドラマにオトメンってのあったよね。おばさんみたいな彼氏ってことは、オバメン？」

「歩君もわざとでしょ？」

よっちゃんは苛々したように言った。

「ねね、よっちゃん。歩君で、岡田君よりもかっこいいよね！」

めげずに横入りしようとする、よっちゃんに頭をつかまれて、耳元ですごまれた。

「もう、ちひろは黙っててよ。せっかく、どす黒いお兄さんの化けの皮を剥いでやろうと思っっているのに」

「どす黒い？歩君、わりと色白だよ。髪も茶色っぽいし、きっと元々色素が薄いんだね」

「・・・もう、いいや。頭痛がしてきた」

はあ、とため息をつく、よっちゃんはこめかみをおさえた。

急にぐいっと腕を引っ張られた。

「ちひろ、アイス買ってあげようか」

歩君の指差す方にフォーティワンアイスクリームのピンク色のお店があった。

「うん！よっちゃんも食べよう」

「やめとく。焼肉食べるし、明後日、海行くし」

よっちゃんめ、彼氏の前で水着を着る気だ。

「ちえっ。歩君は？」

「ちひろが好きなやつ買っておいで。あとで一口もらうから」

二人を残して、私はアイスクリーム店に入った。

店員さんがアイスを盛ってくれている間、一度だけ振り向いたら、よっちゃんが怖い顔をして歩君と話していた。

歩君は反対側を向いていたら、顔を見ることはできなかった。

「お待たせ」

アイスを持って、ふたりに駆け寄ると、よっちゃんが浮かない顔で私を見た。

「あたし、帰るわ」

「え、ちょっと。よっちゃん？」

「ごめん、ちひろ。また、メールするから」

小さくなっていくよっちゃんの中をポカンとして見つめていると、不意に親指の付け根に生温かいものが触れた。

「アイス溶けてた」

歩君は、いつものように優しい笑顔で言うと、歩き出した。

苦しいほど熱い夏と十六歳の誕生日は、すぐそこまで来ていた。

五分目

深夜、私はよっちゃんと電話で乙女の密談をしていた。

「誕生日じゃん。夕方の講習をさばればいいでしょ」

「無理だよ」

「なんで？」

「お父さんに授業料払ってもらっているんだよ」

「：いちいち可愛い奴め。じゃあ、お店を休みなよ」

「休日じゃダメなの？」

「ダメ」

「店の方はステファンに頼めば、大丈夫だと思うけど」

「金曜日の1時に駅前集合だよ。それと、歩君にはお店に出てることにしといて」

「なんで、歩君に言ったらいけないの」

「悪霊退散」

「？」

「あんたは知らなくていいよ。あ、キャッチだ。じゃあね」

よっちゃんは、強引に電話を切ってしまった。

時計を見ると、十二時になっていたので、キッチンに下りて、歩君の夕食を作った。

もうすぐ模試だから、最近夜中まで勉強しているんだ。

リゾート・アル・リモーネ（レモン風味のリゾート）を持って、部屋のドアをノックしたけれど、返事がない。

「歩君？」

部屋の中に入ってみると、歩君は、机にうつぶせになって眠っていた。

ブランケットをかけようと近づいたとき、歩君の額に汗が浮かんでいることに気がついた。

「・・・き」

苦しげに何か呟く歩君は、うなされているようだった。

「・・・つき」

あんまり苦しそうなので、私は歩君の体を揺さぶった。

「歩君、起きて。歩君」

何度か声をかけていると、突然手を掴まれた。

目を覚ましたのかと思ったけれど、歩君は目を瞑ったままだ。

「おいていかないで」

歩君の声は迷子の子供みたいに弱弱しくて、一瞬聞き間違えかと思った。

私は歩君の手をぎゅっと握り返した。

「大丈夫だよ。どこにも行かないから」

歩君は、安心したように息を吐くと、深い眠りに落ちた。

見てはいけないものを見てしまったのかもしれない。

次の日になると、いつもの歩君だったので、その夜のことは忘れることに決めた。

歩君をおいてけぼりにした人は誰だろうと深く考えて、勝手に胸を痛めたりしないよう努力した。

私だって、暇じゃない。

手持ちの服をコーディネートしたりメイクの研究したりするうちに、約束の日になった。

金曜日は、暑くて日差しが強い日で、ランチの客足もまばらだった

ので、問題なく早びけすることができた。

講習は六時に始まるので、時間は十分ある。

よっちゃんと駅で待ち合わせして、カフェに向かった。

そわそわしながら、髪やワンピースの裾をいじっていると、よっちゃんに呆れられた。

「緊張しすぎじゃない？」

「だって、よっちゃん。男の子と遊ぶなんて、入学式の後のクラス会以来だよ」

「普段は学校終わったら、お店に直行だもんね。夏休みだし、いい機会だと思って楽しみな」

「うん！」

カフェでは、よっちゃんの彼氏である佐々君とその友達が待っていた。

佐々君の友達は、菅原君といった。

小柄で、全体的にこざっぱりした男の子だ。

黒髪をさっぱりと短髪にしている、短パンに半そでシャツという夏らしいさっぱりした格好だった。

切れ長の目と薄い唇が冷たい印象を与えていたけれど、話してみる

と、面白い子だった。

菅原君は料理が趣味らしく、話が合った。

私達の会話が弾んでくると、よっちゃんと佐々君は二人でどこかに行ってしまった。

おせっかいカップルがいなくなると、私は聞きたかったことを切り出した。

「間違っていたら、申し訳ないんだけど、」

「何？」

菅原君は、愛想の良い笑顔で聞き返した。

「菅原君で、女の子好きじゃないよね？」

菅原君の顔から笑みが消えて、しばらく沈黙があった。

「なんで、分かったの？いつから？」

さっきまでとは打って変わって、冷たい声だった。

「知り合いにそういう人がいるんだ。雰囲気で、なんとなく。あ、でも、よっちゃんは気づいていないと思う」

「気づいていたなら、すぐ帰ればよかったのに。俺があんたの機嫌をとっているのを腹の中で笑ってたんだ？」

「面白かったよ。でも、菅原君が思っている理由とは違う。菅原君と話すのが楽しかったから、帰らなかったんだよ。本当のことを聞いて、友達になりたいなと思ったの」

「俺は、あんたみたいな女、すごい嫌い」

「そっか」

私達は、それきり黙って、アイステイーを飲んだ。

彼氏になってもらうのは無理でも、友達になれるかなと思ったのだけど。

菅原君にその気がないなら、仕方がない。

会計を済ませて、外に出ると、雨が降っていた。

雨が降るなんて、天気予報では言っていなかった。

カフェで一本だけ残っていた傘を貸してもらえたけれど、菅原君と駅まで相合傘をする羽目になった。

私も菅原君も小柄なので、すっぽりと傘にはまった。

途中で、菅原君が口を開いた。

「あんたさ、なんで今日来たの？」

「よっちゃんが男の子紹介してくれるって言ったからだよ。なんで？」

「恋愛したいってオーラ出ていなかったから」

「？」

「好きな人、いるんじゃないの」

菅原君は、さすがに女心に鋭かった。

もう二度と会わないだろうし、言っても問題なさそうなので、私は本当のことを話した。

「大事な人はいるよ。でも、付き合ったりとかはできないし、したくないんだ」

「ふーん」

「今日ね、私の誕生日なんだ。そのまま帰ったら、おめでどうって言われると思う。そしたら、きっともっと好きになっちゃうんだもん」

「だから、他の男に会いにきたってわけか」

「かっこいい男の子におめでどうって言われて、普通にドキドキしたかったから」

「馬鹿だな」

菅原君は、鼻で笑った。

「どうせ、馬鹿だよ。でも、どうしようもないんだ」

突然、肩を掴まれて、引き寄せられた。

菅原君の長い睫毛が息がかかるくらい近くにあった。

「可哀そうだから、誕生日プレゼントあげる」

頬にふわつとしたものが触れたかと思うと、離れていった。

キスされたのも信じられなかったけれど、その瞬間を誰かが見ているなんて、思いもよらなかったんだ。

五分目（後書き）

「菅原君の重力」から出張してきた菅原君です。

六分目

どうやって家に帰ったのか、よく覚えていない。

気が付いたら、部屋の鏡の前に座っていて、うつろな目がこちらを見ていた。

全身びしょびしょで、滴り落ちる水で床が濡れていた。

「シャワー浴びなきゃ」

そう呟いて、浴室に向かった。

熱いシャワーを浴びて、頭がすっきりすると、菅原君の顔が思い浮かんだ。

心臓がばくばくいつてる。

気を落ち着かせようと、ソファーに寝転んで目を瞑ったけれど、早鐘のように打つ心音はおさまらない。

「どうかしてる。落ちつけ、ちひろ」

単純な自分に言い聞かせた。

誕生日に出会った人に、生まれて初めてキスされた。

ドキドキするのは、何もかもができすぎていたせいだ。

女の子に興味ないくせに、何してくれちゃってるんだろう。

たしかに歩君以外の人に目を向けたいと思っていたけれど、事態は間違った方向に転がってしまったような気がした。

「くちびるじゃないし！ほっぺにチュッてくらいだし！」

口に出したら、頬がチリチリと熱くなった。

うー、と私は唸った。

「なんで、無理な人ばかりにドキドキしちゃうんだろう。顔か？私、面食いな？」

冴えない容姿の分際で、なんと図々しい。

「忘れろ、忘れろ。全部忘れるんだ。わくすくれくろく」

目を閉じたまま、ぶつぶつ唱えていると、睡魔が襲ってきた。

雨の音が心地よくて、私はいつの間にか眠ってしまった。

夢の中で、私は誰かとキスをしていた。

軽く触れるようにキスされた後、貪るようなくちづけを交わした。

そんなキスの仕方は知らなかったので、夢の中の私は驚いていた。

キスって、舌の使い方が重要なんだ。

唇や歯茎を撫でるように舐められると、ゾクゾクした。

舌を絡め取られてからは、無我夢中で相手に合わせた。

薄暗がりの中で相手の顔は見えなかったけれど、無意識に気づかないふりをしていたのかもしれない。

青白い閃光が走って、視界が明るくなった。

自分に覆いかぶさる人物と目が合った時、耳をつんざくような雷鳴が響き渡った。

「あゆむくん？」

「なに、その顔」

歩君は、口元をゆがませて、くっとう喉で笑った。

唇が濡れていることに気が付いた。

私は一体何をしでかしたのだろう。

「ちひろ」

いつもと変わらない優しい声が私の名前を呼んだ。

「気持ち良かった？」

長い指がずっと私の唇を撫でて、歯に触れる。

夢ではなく、現実だった。

急に恐ろしくなった。

逃げようとしても、両手で肩を押し付けられているから、身動きができない。

必死に暴れる私を愉快そうに眺めているのに、瞳の奥は、冷めきっていた。

「今日、駅でちひろを見たよ。キスされていた。あれ、彼氏？」

首を横に振ると、頭を優しく撫でられた。

「彼氏なわけないか。ちひろは、俺のことが好きなんだもんね」

否定するために首を振ろうとしたけれど、顎を掴まれた。

「俺もちひろが好きだよ。別にいいじゃん。実の兄妹ってわけじゃないんだから」

キスされそうになったけれど、自由になっていた右手で防いだ。

「血つながっているかもしれないんだよ」

泣きそうになりながら告げると、歩君はわずかに目を見開いた。

秘密にしておこうと思ったけれど、もう言わずにはいられなかった。

もう触れる気なんておきないだろう。

そう思って立ち上がろうとしたら、強い力に引き戻されて、歩君の膝の上に乗せられてしまった。

立ち上がろうとしても、腰に巻き付いた腕がそれを許さない。

耳元でクスクスと笑い声が聞こえた。

「知ってたんだね。ちひろのことだから、何も気づいていないと思っていた」

「なんで、」

「俺はちゃんと知っている。自分の父親が最悪な人間かってことぐらい理解しているつもりだよ」

「お父さんは良い人だよ」

「一度はあんたら親子を捨てた男でしょ」

「二人で決めて、別れたんだよ。捨てたわけじゃない」

「無責任で身勝手な男だよ。まあ、香織さんも面の皮が厚いから、お似合いかもね」

「歩君、怒っている」

「怒っているんじゃない。父さんと香織さんは、人を傷つけた報いを受けた方がいいと思っているんだ」

「お母さん達が傷つけたのは、歩君のお母さん？」

「そうだよ。あの人がかりが苦しんだ」

「お母さんだって、お父さんも苦しんでたんだよ。二人を責めないで。私が謝るから。お母さんの分も謝るから」

胸が痛くて苦しくて、涙が出てきた。

「ごめんなさい。歩君のお母さんと歩君を傷つけてしまったこと、本当にごめんなさい」

「もしかしたら、ちひろが生まれたせいかもしれないね。あの二人よりも悪いのはちひろかもしれない」

そう言って歩君は、私の耳を強く吸った。

「っん」

小さく声を上げると、背後で歩君が笑った気配がした。

「ちひろはホント単純だよ。優しくされたら、すぐに俺のこと好きになった」

首筋も吸いつかれて、歯を立てられた。

「っんあ。やあっ」

「やめないよ。めちゃくちゃにしてあげる。最初からそのつもりだったんだ。優しくして恋したら、兄妹だってばらしてやろうと思って

た。もう知っているだったら、この方法が手っ取り早いよね」

楽しげに言う歩君が恐ろしくて、全身が震えた。

Tシャツの裾からするりと忍び込んだ大きな手が胸に触れたかと思うと、一気にブラジャーを上を押し上げた。

「お願いだから、やめて」

泣きながら懇願しても、歩君の手は止まらない。

「ちひろがいけないんだよ」

覆うものがなくなった胸の膨らみを筋張った手が揉みほぐす。

「私が悪かったの。謝るから、もうやめて。お母さんが帰ってき」

言い終える前に顎をつかまれて振り返るように斜め上を向かされた。

「見せてやればいい」

残酷な言葉は、激しい口付けと共に降ってきた。

無理矢理に口をこじ開けられ、舌を絡ませられていたから、しばらくは話すことはおろか、息をすることさえままならなかった。

それでも、伝えなければいけない言葉があった。

熱く執拗な唇が離れた一瞬の隙を逃さず、口を開いた。

「で、出ていくから」

歩君が動揺を見せたとき、心はすでに悲しみでいっぱいだった。

六分目（後書き）

ええと、禁断恋愛物ではないです。一応。

七分目

ふいに身体を囲っていた腕が解かれた。

「行けば」

歩君は興味を無くしたように言うと、私を押し退けた。

「バカヤロー」と怒鳴って頭を叩いてやりたかったけど、立ち上がってそのまま家を出た。

誕生日なのにどうしてこんな目に遭うんだろう。

大雨が降っているのに何しているんだろう。

でも、家には居たくなかったし、家族をめちやくちやにする計画に加担する気はなかった。

よっちゃんは佐々君と一緒にいるかもしれないから、ステファンの家に行くことにした。

築五十年の渋い木造家屋のチャイムを鳴らすと、清志君が顔を出した。

吹けば飛びそうなほどげっそりと痩せているけれど、眼鏡が斜めに傾いているところに愛嬌がある。

「やあ、ちひろちゃん。久しぶり」

清志君は臨終の人みたいに弱々しい声で言うと、私を招き入れた。

「ステファンはいないの？ 今日、お休みの日だよね？」

「買い物にいつているよ」

それだけ言うと、書斎に行ってしまったので、私は台所に向かった。別に私を嫌っているわけではなく、他人に構わないのが清志君のスタイルなのだ。

この家に来ると、大抵お茶はセルフサービスになる。

清志君は、ステファンの年下の恋人で、一緒に暮らしている。

仏教だか何だかの研究をしている人で、本を何冊も出しているらしい。

研究に没頭すると、生理的欲求（食欲・睡眠欲等）をすっかり忘れてしまう清志君は、私が知る限り、少なくとも三度は栄養失調で死にかけている。

道端で倒れていた清志君を哀れに思ったステファンが家に連れてきて、食事をご馳走してあげたのが、二人の愛の始まりだったそうなの。

現国の授業で夏目漱石の「こころ」を読んだとき、清志君（頭文字もKだし）の顔が浮かんだ。

清志君は、俗世間から離れて暮らすお坊さんのような人だ。

しかも、現代を生きているというより同性愛が盛んだった頃のお寺で生きているようで、自分の恋愛が一般的な男性と異なっていることをあまり気にしていない。

二人分の麦茶を持って書斎を覗くと、清志君は肘掛椅子に座って熱心に読書していた。

肘掛椅子の足元に腰を下ろした私は丸くなって目を閉じた。

七時位にステファンが帰宅した。

私を見ると、すこし驚いたようだったが、丸い眼鏡をくいと上げて、ウインクした。

ピザを作るといので、手伝うことにした。

ステファンが生地を薄くのばしている間、私はトマトソースを作った。

オリーブオイルでニンニクと鷹の爪を軽く炒めて、缶入りのトマトを入れて軽く煮込むだけ。

簡単なことなのに、オリーブオイルが飛んだら、熱くて涙が出てきた。

ガスコンロの前でボロボロ泣いていたら、ステファンが火を止めた。

「チヒロ、今日はやめておきなヨ。アトは、ボクがやるから」

これあげるよ、と差し出されたチョコレートバーを受け取って、壁

に寄りかかった。

ステファンの背中は、小山のように大きい。

「ステファンは、好きになっちゃいけない人を好きになったことがある？」

「あるヨ」

「どんな人？」

「神父さま」

「神父様？」

「うん。イタリアの、故郷の村にいたとき、ローマから若い神父がやってきてネ。すっかり夢中になってしまったんだ」

「なんで、神父様のことを好きになっちゃいけなかったの？」

「ボクには奥さんがいた」

ビックリして顔を上げると、ステファンの淋しげな横顔が目映った。

「好きだから、奥さんと結婚したんじゃないの？」

「好きだったヨ。でも、愛してなかった。パパが決めた結婚だったから」

「それから、どうなったの？」

「カトリック教徒が多い保守的な村だったからね。その神父もボクも村を出なければいけなくなった。最初は、シアワセだった。でも、彼はボクよりも信仰心を選んで去っていった。ボクには何も残らなかった」

ステファンは、自嘲気味に笑った。

ピザをオーブンに入れると、ステファンはテーブルに座って、ワインをグラスに注いだ。

美味しそうに飲むので、一口飲んでみたくなった。

グラスに口をつけた時、ステファンが口を開いた。

「ボクとキヨシの間に肉体関係はないんだ」

「ブッ」

思わずワインを吐きだしてしまった。

ゲホゲホと咳き込んでいると、水を差し出された。

「チヒロも大きくなったから、こういう話ができるようになったネ」

ステファンは、なぜか誇らしげに笑っている。

そういえば、小さい頃によくこんな風にステファンを話していたことを思い出した。

幼い私は何でも知りたがって、ステファンは何でも答えてくれた。

「男の人を好きになることに罪悪感を感じたことはある？」

「うん。時々心が重くなって堪らなくなる。でも、誰も愛さなくなる方がもっと辛いつてことを知っているから、ボクはやめないヨ」

「誰も愛さなかった時があったの？」

「前の恋人に振られた後。ニホンに追っかけてくるほど好きだったのに、振られてしまった時は死ぬほど辛かった。もう誰も好きになるもんかって思っていたんだけど、好きにならずにいられない人が現れた」

「誰？」

「チヒロ」

「私？」

「うん。赤ちゃんのチヒロを見たとき、愛しているって思った。それしたら、急に気持ちが悪くなった。誰かを好きになると、満たされた気持ちになるんだネ」

「好きになっちゃいけない人を好きになってもいいの？」

「ホントは、好きになってはいけない人なんか、この世に存在しないかもしれないヨ。むしろ、問題は愛し方じゃないかな」

ステファンはオーブンを覗き込みながら答えた。

「どうすればいいの？」

「ボクも少しずつ試しているところだから、まだ分からないヨ。でも、誰も傷つけない愛し方っていうのが、どこかにあると信じているんだ」

ステファンは、いつかイタリアの故郷に帰るだろう。

そんな予感がしたら、気持ちが軽くなった。

自分の気持ちを受け入れてしまえば、相手とぶつかるのは容易いように思えた。

人生初の兄妹ゲンカをふっかけるべく、私は家に帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8952x/>

アルデンテ

2011年11月11日13時17分発行